

## 中国における日本語教育と経済格差 —南京市 4 大学の比較調査から—

林 祥瑜<sup>1</sup>・新村 聡<sup>2</sup>

### 目次

#### はじめに

1. 学生の所属大学・学力水準と両親の職業・所得との関連
2. 卒業後の進路希望と予想される問題・困難

#### おわりに

### はじめに

近年、中国の大学には日本語学科が次々と設置され、日本語を専門として勉強する本科生および第二外国語として勉強する学生の人数が急速に増加してきた。中国南京市のほとんどの大学と短期大学には日本語科が設置され、また江蘇省には日本語学科を有する大学が約 40 校あって日本語科の学生数は約 1 万人におよぶ。しかしひとくちに日本語学科の本科生といっても、大学によって学生の学力水準は大きく異なっている。そして学生の所属大学および学力水準と両親の職業・所得とは密接に関連していると考えられる。

そこで、学生の所属大学と両親の職業・所得との関連を調査するために、2012 年 3 月～8 月に、中国南京市の 4 大学の日本語科本科生を対象とするアンケート調査を行った。本稿では、調査した 4 大学を A 大学、B 大学、C 大学、D 大学と略記する<sup>3</sup>。アンケートを依頼した学生数は、A 大学 20 人、B 大学 28 人、C 大学 44 人、D 大学 67 人の合計 159 人であり、回答者数は合計 158 人で回答率 99.4%であった。回答者は全員が日本語科に所属し、学年は 3 年生または 4 年生で、性別は女子 85%、男子 15%であった。

以下では、第 1 節で学生の所属大学と両親の職業・所得との関連について検討し、第 2 節で学生の日本語学習の動機と将来の進路志望および予想される問題・困難とその対策について考察する。いずれもアンケートの主要な質問項目ごとに大学別の回答者比率を示し、その内容を分析する。そして「おわりに」では、以上の考察をまとめて、今後の課題について検討する。

<sup>1</sup> 中国南京師範大学中北学院講師

<sup>2</sup> 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

<sup>3</sup> 4 大学は、A：南京大学、B：東南大学、C：南京師範大学外語学院、D：南京師範大学中北学院である。C と D は経営的には同一大学であるが、入学者選考が別基準で行われ、教育も別個になされているので、本稿では区別して扱っている。

## 1. 学生の所属大学と両親の職業・所得との関連

### 1. 1. 4 大学の学力水準

表 1 は、今回の調査対象となった 4 大学の日本語科の大学入試全国統一試験における最低合格点である。入学の難易度および学力水準で区分すると、A 大学は学力上位校、B 大学と C 大学は学力中位校、D 大学は学力下位校といえるであろう。

表 1：各大学日本語科の全国統一試験最低合格点

	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学
2011 年	377	365	365	314
2010 年	386	—	370	314
2009 年	393	—	374	321

(出所：各大学のホームページ。空欄はデータなし。)

### 1. 2. 学生の現在の日本語能力のレベル

調査した 4 大学の日本語科学生に、現在の日本語能力のレベルについて質問した。表の数字は、それぞれの選択肢を選んだ学生が各大学の回答者全体に占める比率を%で示したものである（以下の表も同様）。

表 2：学生の日本語能力

	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学
①日本語能力試験一級	70	25	57	10
②日本語能力試験二級	20	68	11	34
③日本語能力試験は未受験 だが、日常会話は問題ない	5	7	32	46
④初心者	5	0	0	10

(単位 %)

日本語能力試験の合格者数は、大学によってかなり差がある。能力試験一級の合格者数（表の①）は、A 大学 70%、B 大学 25%、C 大学 57%、D 大学 10%であり、また一級と二級の合格者数の合計（①+②）は、A 大学 90%、B 大学 93%、C 大学 68%、D 大学 44%である。学力水準の高い大学ほど試

験の合格者数の割合も多い<sup>4</sup>。

### 1. 3. 日本語学習の困難

学生が日本語学習で感じている困難について質問した。その結果が表3である。

表3：日本語学習の困難（複数選択）

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本語の文法	35	43	48	67
②日本語の読解	15	18	27	28
③日本語の聞き取り	60	57	68	73
④日本語の会話	50	39	68	50
⑤ほとんどなし	0	7	2	0
⑥その他	0	7	2	0

(単位 %)

①文法、②読解、③聞き取りのいずれについても、学習に困難を感じている学生の比率は、学力上位大学ほど少なく、学力下位大学ほど多い。他方、会話の学習に困難を感じている学生の比率は大学間でほとんど差がなく、4大学すべてで高い比率となっている。

中国の日本語教育において、多くの学生が会話の学習に困難を感じている。その大きな理由は会話の授業数が少ないことである。ほとんどの大学で、会話の授業数は週に1~2回程度である（金香蘭、2012）。

### 1. 4. 学生の両親の職業

学生の両親の職業について質問した結果が表4である。この表4から読みとれる明白な傾向は、学生の父親または母親が教師である比率が大学によって非常に異なることである。父親が教師である学生は、A大学25%、B大学25%、C大学9%、D大学8%であり、母親が教師である学生は、A大学44%、B大学28%、C大学5%、D大学4%、となっている。学力上位のA・B両大学と学力下位のC・D大学とでは顕著な差を示しており、とくに父親よりも母親のほうが差が大きい。A大学では、じつに学生の母親のほぼ2人に1人、父親の4人に1人が教師である。このデータは、両親の文化的な要因が子供の学力に非常に大きな影響を与えることを示している<sup>5</sup>。

両親の職業として教師と対照的な傾向を示すのが工場労働者である。父親が工場労働者である学

<sup>4</sup> B大学では一級と比べて二級の合格者数の比率が高いが、これは大学の教育方針（二級から受験を勧める）の影響ではないかと思われる。

<sup>5</sup> 家族の影響については、多くの先行研究が、経済的要因だけでなく文化的要因の重要性を指摘している。小山内透 1995、Esping-Andersen 2009, ch. 4などを参照。

生は、A大学5%、B大学0%、C大学9%、D大学20%であり、母親が工場労働者である学生は、A大学0%、B大学0%、C大学10%、D大学29%となっている。C・D大学では父親よりも母親のほうがより大きな比率を示しており、とくにD大学では学生の母親のほぼ3人に1人が工場労働者である。学力上位大学の学生の両親に教師が多いのと対照的に、学力下位大学の学生の両親には工場労働者が多いことがわかる。

表4：学生の両親の職業

	父 親				母 親			
	A大学	B大学	C大学	D大学	A大学	B大学	C大学	D大学
①企業の職員	20	29	32	24	6	28	18	24
②公務員	20	25	14	3	6	12	13	0
③医療関係	5	0	2	2	6	4	0	0
④教師	25	25	9	8	44	28	5	4
⑤軍人	5	0	0	2	0	0	0	0
⑥工場労働者	5	0	9	20	0	0	10	29
⑦農民	5	0	14	2	6	4	15	4
⑧アルバイト	0	0	0	3	6	0	2	6
⑨無職	0	4	0	2	6	16	18	15
⑩その他	5	4	7	18	6	4	15	16
⑪自主経営	10	11	16	20	13	4	5	4
①+②+③+④	70	79	57	37	62	72	36	28
⑤+⑥+⑦+⑧	15	0	23	27	12	4	27	39

(単位 %)

次に、全般的な傾向を見るために、①～④をホワイトカラー系職業、⑤～⑧を非ホワイトカラー系職業として大きく二分して、それぞれを集計した。ホワイトカラー系職業（①+②+③+④）の比率は、父親ではA大学70%、B大学79%、C大学57%、D大学37%であり、母親ではA大学62%、B大学72%、C大学36%、D大学28%となっている。学力上位の大学ほど学生の両親にホワイトカラー系職業が多い。他方、非ホワイトカラー系職業（⑤+⑥+⑦+⑧）は、父親ではA大学15%、B大学0%、C大学23%、D大学27%、母親ではA大学12%、B大学4%、C大学27%、D大学39%であり、とくにC・D大学の学生の両親に非ホワイトカラー系職業が多い。

全体として見ると、学力上位校の学生の両親に学歴と所得が相対的に高いホワイトカラー系職業が多く、反対に学力下位校の学生の両親に学歴と所得が相対的に低い非ホワイトカラー系職業が多いといえるであろう。

## 1. 5. 学生の両親の所得

学生の両親の所得について質問した結果が表 5 である。

表 5：学生の両親の所得（月収）

月収	父 親				母 親			
	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学
①0—1500 元	0	4	19	15	20	5	35	33
②1500—3000 元	6	4	26	32	7	10	30	45
③3000—5000 元	44	44	38	37	40	30	25	11
④5000—10000 元	39	30	7	7	27	55	5	4
⑤10000 元以上	11	17	10	8	7	0	5	6
①+② (3000 元未満)	6	8	35	47	27	15	65	78
③+④+⑤ (3000 元以上)	94	91	55	52	74	85	35	21
④+⑤ (5000 元以上)	50	47	17	15	34	55	10	10

(単位 %)

表 5 を見ると、大学によって両親の所得水準が非常に異なっており、学生の学力水準と両親の所得水準とがほぼ対応していることがわかる。父親の所得では、月収 3000 元以上 (③+④+⑤) が、A 大学 94%、B 大学 91%、C 大学 55%、D 大学 52% であり、他方、月収 3000 元未満 (①+②) が、A 大学 6%、B 大学 8%、C 大学 35%、D 大学 47% である。同様に、母親の所得でも大学間の格差が大きい。母親の所得では、月収 3000 元以上 (③+④+⑤) が、A 大学 74%、B 大学 85%、C 大学 35%、D 大学 21% であり、他方、月収 3000 元未満 (①+②) が、A 大学 27%、B 大学 15%、C 大学 65%、D 大学 78% である。あきらかに学力上位の大学ほど学生の両親は高所得であり、学力下位の大学ほど学生の両親の所得は低いことがわかる。

以上の検討から、学生の学力水準と両親の職業・所得との相関関係は明らかである。学力水準がより高い大学で勉強している学生の両親は、より高い所得の職業についている。所得の格差は教育不平等の直接的な理由である (龍翠紅 2011、143)。

## 2. 卒業後の進路希望と予想される問題・困難

### 2. 1. 学生の日本語学習の動機

学生の日本語学習の動機について質問した結果が表 6 である。この表 6 に示されているように、日本語学習の動機については、学力水準との相関関係はほとんど見られない。どの大学の学生でも日本語を学ぶ動機はさまざまであり、大学による違いはほとんどない。

表6：日本語学習の動機（複数選択）

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本語に興味を持っているから	50	36	41	9
②日本のドラマやゲームがすきだから	30	79	36	40
③将来の就職活動に役立つから	20	39	21	30
④日本へ留学したいから	55	39	61	40
⑤両親や家族の人に勧められたから	20	21	25	13
⑥志望専攻に落ちて日本語科に配分されたから	15	7	11	12
⑦その他	15	14	7	2

(単位 %)

## 2. 2. 卒業後の進路希望

卒業後の進路希望について質問した結果が表7である。

表7：卒業後の進路希望

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本企業に就職したい	50	25	66	69
②日本へ留学したい	20	26	18	16
③中国の大学院へ進みたい	10	14	9	6
④その他	20	32	14	10

(単位 %)

表7を見ると、卒業後の進路希望について大学間の差は存在しているが、それほど大きいものではない。卒業後に日本企業への就職を希望する学生の比率は、学力上位大学よりも下位大学のほうがやや多く、A大学50%、B大学25%に対して、C大学66%、D大学69%である。その理由として考えられるのは、学力上位大学では、大学院進学を希望する学生がやや多いことである。

日本への留学を希望する学生の比率は、学力上位大学のほうがやや多いとはいえ、差はそれほど大きくはない。日本へ留学を希望する学生のほとんどは日本の大学院への進学を希望しているので、②+③で、日本または中国の大学院へ進学を希望する学生の比率を知ることができる。②+③は、A大学30%、B大学40%、C大学27%、D大学22%であり、A・B大学はC・D大学よりも多い。

なお、就職希望者のほとんどは日系企業へ就職を希望していると思われるが、「その他」を選ん

だ学生の中には「中国企業、欧米企業あるいは公共機関に就職したい、公務員になりたい」と書いた者も少数いた。

### 2. 3. 日本企業への就職を実現するために予想される問題・困難

卒業後の進路希望として「日本企業に就職したい」と回答した学生に、予想される問題・困難について質問した結果が表8である。

表8：日本企業への就職を実現するために予想される問題・困難（複数選択）

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本語能力が不十分	60	50	48	74
②情報が少ない	30	50	52	41
③仕事の経験がない	70	88	72	78
④その他	10	0	0	2

(単位 %)

日本企業への就職希望者に予想される問題・困難では、大学間に差はほとんど見られない。どの大学でも、かなり多くの学生が、「日本語能力が不十分」と「仕事の経験がない」を選択している。

### 2. 4. 日本留学を実現するために予想される問題・困難

卒業後の進路希望として「日本へ留学したい」と回答した学生に、予想される問題・困難について質問した結果が表9である。

表9：日本留学を実現するために予想される問題・困難（複数選択）

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本語能力が不十分	25	0	13	36
②情報が少ない	75	100	50	82
③お金がない	0	0	38	55
④日本の受入先が見つからない	75	100	38	46
⑤その他	0	0	0	0

(単位 %)

表9を見ると、日本留学を希望する者にとっての問題・困難は、「A大学とB大学」および「C大学とD大学」の2グループに大きく分かれている。A大学とB大学では、ほとんどの学生が、②「情報が少ない」と④「日本の受入先が見つからない」を選んでいるのに対して、③「お金がない」を

選んだ者は一人もない。これに対して、C大学とD大学では、③「お金がない」をあげる者が多く、とくにD大学では過半数の55%が③「お金がない」と回答している。これは、表5に示された両親の所得の格差と関係していると思われる。したがって、日本留学を促進・支援するための方策として、A大学とB大学ではいっそうの情報提供が必要であるのに対して、C大学とD大学では奨学金などの経済的支援がとくに重要と思われる。

先に見た表6で、日本語学習の動機として「日本へ留学したいから」と回答した学生は、A大学55%、B大学39%、C大学61%、D大学40%であり、また表7で、卒業後の進路希望として「日本へ留学したい」と回答した学生は、A大学20%、B大学26%、C大学18%、D大学16%であった。両者の差は、大部分が入学後に日本留学の夢を断念した者と推定され、A大学35%、B大学13%、C大学43%、D大学24%である。この数字はかなり大きなものであり、今後、各大学の学生に対する留学支援のいっそうの充実が望まれる。

## 2. 5. 中国の大学院へ進学するために予想される問題・困難

卒業後の進路希望として「中国の大学院へ進みたい」と回答した学生に、予想される問題・困難について質問した結果が表10である。この表10を見ると、進学を希望する学生の問題・困難として多いのが「日本語能力が不十分」と「情報が少ない」である。後者については、学生が求めている情報を提供する支援が必要であろう。

表10：中国の大学院へ進学するために予想される問題・困難（複数選択）

	A大学	B大学	C大学	D大学
①日本語能力が不十分	100	25	25	75
②情報が少ない	0	75	50	50
③お金がない	0	25	0	25
④その他	0	0	0	0

(単位 %)

上記の各設問以外に、自由記述の意見として、「日本人との会話やコミュニケーションの機会が少ないので増やしてほしい」という要望を書いた者が多かった。

## おわりに

以上で考察したように、各大学の学生の学力水準と両親の職業・所得との相関関係は明らかである。学力水準がより高い大学で勉強している学生の両親の職業には教師・公務員などが多く、平均的な所得水準も高い。



両親の子供に対する影響には2つの要因が考えられる。第1に、より高い所得を得ている両親は子供の教育により多くの支出が可能であり、塾や家庭教師などをより多く利用できるため、子供の学力水準は高くなる傾向がある。第2に、教育水準が高い両親との日常会話から子供は知的刺激を受けたり良い学習習慣を形成したりすることが多い。以上のような経済的要因と文化的要因の両者によって、両親の職業・所得と子供の学力が高い相関関係を持つようになっていると考えられる。そして所得水準が高い親は平均して教育水準も高く、これら2つの要因は重複することも多い。今後、両親の学歴や教育支出について調査すれば、こうした関係をさらに確認できると思われる。この点は残された課題である。

将来の進路について、学力上位の大学の学生は就職よりも留学や進学を希望している者が多い。その結果、より高い水準の教育を受けて、より高い所得水準の職業に就く可能性も高くなると予想される。こうして、両親の経済格差は子供の教育格差を通じた経済格差として再生産されるのである。

2011年の東日本大地震以後、中国では日本の現状があまり知られていないため、留学中の安全を心配して留学希望者が急減した。今後は、日本人とのコミュニケーションの機会をもっと増やし、日本企業への就職や日本の大学への留学に関する情報をより多く紹介すれば、留学希望者にも就職希望者にも役立ち、日本語学習の動機づけにもなるのではないと思われる。その具体的な方法については今後の課題として検討を続けたい。

### <参考文献>

(中国語文献、[ ]内は日本語訳)

修剛、2008、中国高等学校日语教育の現状と展望 [中国の大学における日本語教育の現状と展望]、*日语学习与研究* 5、1-5。

金香兰、2012、浅谈我国日语教育中存在的问题与对策 [わが国の日本語教育における問題点及び対策]、*神州(教育)* 23、113。

宁光洁、2009、教育扩张能改善收入分配差距吗 [教育の拡張は収入分配の格差を改善できるか]、*中国经济学*、49-72。

龙翠红、2011、中国的收入差距、经济增长与教育不平等的相互影响 [中国における収入の格差、経済成長及び教育不平等の相互影響について]、*华东师范大学学报* 5、138-146。

(日本語文献)

赤坂真人、2012、現代中国における経済格差と教育格差—所得格差が生む教育格差—、*吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系)* 22、19-39。

王傑、2003、中国高等教育拡大過程における教育機会の階層間格差の進展：北京市と山東省にある4大学を事例として、*日本教育社会学会大会発表要旨集録* 55、306-307。

小山内透、1995、再生産論を読む、東信堂。

張建、2008、中国都市部における高校段階教育の格差と階層、東京大学大学院教育学研究科紀要 47、461-470。

薛進軍・園田 正・荒山 裕行、2007、中国における教育格差と所得格差— 深圳家計調査に基づく —、経済科学 55 (3)、117-133。

(英語文献)

Esping-Andersen G., 2009, *The Incomplete Revolution*, Cambridge. (大沢真理監訳『平等と効率の福祉革命』岩波書店、2011年。)

(付記) 本研究は日本学術振興会「アジア・コア」事業の支援を受けている。